

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計 最終集計)	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
1 地域(生徒・保護者)の期待と信頼に応える学習指導と進路実現を達成するため、「確かな学力の育成」「家庭学習習慣の確立」を図る。	ICT活用と互見授業により、生徒が主体的・協働的に参加できるように授業改善に取り組む。	教務課 各教科 各学年	授業改善に取り組んでいるが、生徒が主体的・協働的に活動する場面がまだ十分ではなく、ICTの活用やアクティブラーニングへの教員の意識を更に高める必要がある。	【成果指標】 授業に自ら主体的に取り組んだ。	授業に自ら主体的に取り組んでいる。イ まあ取り組んでいる。あまり取り組んでいない。エ 取り組んでいない。 A アとイの合計が90%以上 B Aとイの合計が85%以上 C アとイの合計が80%以上 D アとイの合計が80%未満	(85.9%) B 85.6%	《成果》普通科では80.6%、地域創造科では91.2%の生徒が自ら進んで主体的に授業に取り組んでいる。 11H32%,47.4% 12H66.2%,26.4% 21H34.6%,44.6% 22H42.2%,45.2% 31H34.1%,50.2% 32H71.2%,22.8% 【課題】授業に主体的に参加できない生徒を減少させる。 『改善策』生徒が授業に主体的に取り組めるように、プロジェクトの利用やアクティブラーニング等を積極的に取り入れるように教員へ働きかける。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート
				【努力指標】 生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れた。	授業では生徒がアクティブラーニングやグループ活動など主体的・協働的に活動できる場面を、ア.よく取り入れている。イ.やや取り入れている。ウ.あまり取り入れていない。エ.取り入れていない。 A アとイの合計が80%以上 B Aとイの合計が70%以上 C アとイの合計が60%以上 D アとイの合計が60%未満	(83.3%) B 79.2%	《成果》教員全員が生徒が主体的・協働的に活動できる場面に授業に取り入れている。この中でも29%の教員は授業によく取り入れている状況である。 【課題】生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れているが、十分ではない。 『改善策』プロジェクト利用で板書時間を減らし生徒と向き合える時間を作ったり、生徒が主体的に活動できるようにグループ学習やタブレットなどを利用し、生徒が授業に主体的に参加できるように、各授業担当に工夫するように働きかける。	C以下の場合は取組を改善する。	教員へのアンケート
				【努力指標】 授業改善に生かす目的を持って、互見授業に参加した。	授業改善に生かす目的を持って、互見授業に参加した。 A 7回以上参加した。 B 6回以上参加した。 C 5回以上参加した。 D 5回未満参加した。	(1.36回) C 5.77回	《成果》22名の対象中、6回以上は17名で、全体の77%であり、2回は2名、3回は1名、4回は2名であった。一人あたりの実施回数は5.77回であった。 【課題】目標の6回を達成できなかった教員は5名おり、5名中2名は兼務であった。より多くの教員に参加できるように機会を今以上に増やす必要がある。 『改善策』互見授業ウイークや小中の公開授業への参加を促し、声かけを継続して行う。	C以下の場合は取組を改善する。	教員へのアンケート
2 家庭学習時間調査と個人面談を行うことで家庭学習習慣の定着を図り「確かな学力」を育成する。		教務課 各教科 各学年	家庭学習習慣が身につけていない生徒、家庭学習時間が不十分な生徒が多く、家庭学習習慣の定着が求められている。	【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科1年〕1時間の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	(67.5%) B 74.7%	《成果》年間を通してのクラス学習時間平均は、81.7分であり、1時間の家庭学習時間目標は達成することができた。 【課題】調査や模試の期間では、学習する雰囲気や家庭学習時間が増加傾向にあったが、普段から計画的継続的に学習する生徒が少ない。 『改善策』上級学校進学に向け、模試対策や専門分野での学習の必要性を訴える。また、クラス全体の学習する雰囲気作りを作る。	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科2年〕2時間の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	(43.1%) D 37.8%	《成果》年間を通してのクラスの学習時間の平均は95.5分であった。各教科と連携して、調査や模試に向けての週末課題などを増やした結果、家庭学習時間が伸びたとともに、家庭学習習慣の定着が図られたように見える。 【課題】課題のない日になると、学習時間が下がってしまうので、自主的に家庭学習ができていない。またクラスの中で学習時間に大きな差が出てきている。 『改善策』個人面談を通じて、進路意識を高めさせたり、模試の成績を意識させたりする。また、日々の学習計画を立てさせる。	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科3年〕3時間の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	(13.9%) D 18.8%	《成果》年間としてのクラスの学習時間平均は127.2分であり、中間報告時より5ポイント増加した。受験に向けた学習の取り組みにより、学習時間を増やす生徒が見られた。 【課題】進路が決定した生徒の学習時間が伸び悩んだ。将来の進路先に繋がるような学習を生徒たちに促したが、効果がある生徒が多くなかった。 『改善策』調査時は家庭学習時間は高水準で保つ生徒もいるので、平時から進路先で必要となる課題を生徒たちが意識できるように具体的な計画を立てさせることが必要である。	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域創造科では1時間以上の家庭学習が確保された。	〔地域創造科1年〕1時間以上の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	(20.2%) D 18.5%	《成果》クラス全体では、家庭学習時間の平均が37.0分であったが、120分以上家庭学習時間を確保している生徒が数名いる。 【課題】未だ家庭学習の習慣が身につけていない。 『改善策』就職希望の生徒が多いので、基礎学力テストから、SPI受験なども取り入れ学習の必要性を訴えていく	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域創造科では1時間以上の家庭学習が確保された。	〔地域創造科2年〕1時間以上の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	(12.0%) D 12.3%	《成果》前期と比べ後期は進路実現に向けた意識が高まり、家庭学習時間が全体的に少し増加した。 【課題】調査や検定試験時には家庭学習を行う生徒が増えたが、それ以外の期間は0時間という生徒がいる。 『改善策』進路希望もはっきりしてきており、進路実現に対する意識を高め、学習の積み重ねが必要であることを認識させる。	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計
				【成果指標】 地域創造科では1時間以上の家庭学習が確保された。	〔地域創造科3年〕1時間以上の家庭学習に取り組んでいると答えた生徒の割合が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	(21.1%) D 18.5%	《成果》6名が1時間以上の家庭学習時間を確保している。そのうち、2名が2時間以上の学習を1年間確保した。検定など目的意識のある生徒が目標を達成している。 【課題】進路が決定した生徒は資格や検定などの課題があれば学習時間が伸びるが、目的がないと学習に取り組まない生徒もいる。 『改善策』将来を見据えて資格取得を促し学習の目的意識を認識させる必要がある。	C以下の場合は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計)最終集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考	
③	各課・各教科と学年団との連携と情報の共有化により生徒個々に応じた多面的な進路指導を行い、生徒が進路実現に向けて意欲的に学習などに取り組める環境づくりを進める。	進路指導課各学年	進路希望先を具体的に決定するのが遅れるため、進路実現に向けて準備期間が不十分になる傾向がある。	【成果指標】	〔1年〕 年度末までに、進学はおおまかに上級学校を、就職はおおまかに職種を定め、次の行動を意識できた生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	(76.7%) A 86.2%	《成果》 LHRや進路ガイダンスを通して進路について大まかに目標を定めた生徒が多くいて、2年次からのコース選択を含め次への行動ができた 【課題】 進路設定ができた生徒がいた半面、いまだ未定の生徒9名いる。 『改善策』 担任や進路担当者との面談を通して、具体的な方向性を導く。また保護者との面談や連絡を通して協力を求める。	C以下の場合は取組を改善する。	進路希望調査 生徒へのアンケート	
				【成果指標】	〔2年〕 年度末までに、進学は具体的な上級学校を、就職は具体的な会社を定め、実現に向けて準備を始めた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(50.0%) C 70.5%	《成果》 志望理由書の添削や、担任との面談を通じて、自らの進路に対して考える機会を増えたことで、以前よりも具体的な進路先を定めることができた生徒が増えた。 【課題】 進路について具体的に決まっているものもいるが、未定のもがみられる。 『改善策』 進路ガイダンスや進路調べを通して、自分の興味・関心をつかませる。	C以下の場合は取組を改善する。	進路希望調査 生徒へのアンケート	
				【成果指標】	〔3年〕 内定や合格を得るまでに十分な準備ができたこと回答した生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(44.0%) B 85.7%	《成果》 内定や合格に向けて、早期に目標を設定し、準備を始めたこと回答した生徒が多かった。特に、面接練習や、筆記試験に向けて自主的に取り組んだこと回答した生徒が多かった。 【課題】 一部の生徒で、進路目標が定まらなかったり、進路目標達成への手立てがわからないと回答した生徒がいた。 『改善策』 進路目標が定まらない生徒や進路実現に向けての学習法等で悩んでいる生徒に対し、担任だけでなく、進路指導課や教科担任等による面談を行い、多面的に生徒の特徴を把握し、指導助言できるようにする。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート	
	④	進路指導課と1年学年団・担任との連携により、進路面接の質を高め、面談回数を増やすことで進路目標の早期決定を促す。	進路指導課第1学年	進路目標の設定が遅れ、自己実現のために授業や総合的な学習の時間を有効に活用できていない者がいる。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数、生徒の進路意識を高めるために生徒との個人面談を実施した。	A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	(4回) A 9回	《成果》 ひと月に1回のペースで一人平均9回の面談を行うことができた。その成果として具体的な上級学校や就職先を定めた生徒が45名、大まかに定めた生徒が19名いた。 【課題】 具体的、大まかに進路を定めた生徒がいない反面、未定者が9名いる 『改善策』 未決定者には、担任との面談を通して、また進路指導課の協力や進路の手引きなどを活用させ具体的な上級学校や就職先を考えさせる。	C以下の場合は取組を改善する。	個人面談数調査及び生徒へのアンケート
⑤	今後を見据えた進路指導に取り組み、具体的な進路目標の決定を面談を利用して促すことにより「確かな学力の育成」を図る。	進路指導課第2学年	目標が定まらず進路実現へ向けての具体的な取り組みが足りない。進路決定に向けて授業を有効に活用していない者への指導が必要である。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数、生徒の進路意識を高め具体的に進路を決定するために生徒との個人面談を実施した。	A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	(4回) B 6回	《成果》 面談週間やLHRなどの時間を利用して、生徒一人当たり2～3回の面談を行い、そこで具体的な進路について話をすることが出来た。また、進路目標や学習についての悩みを引き出すことができた。 【課題】 面談を通して、進路や学習など学校生活のことを話すことができているが、話している内容が生徒の具体的な行動につながっていないように感じる。 『改善策』 進路指導室や就職指導室の利用方法や、進路調べの方法などを改めて生徒に提示し、具体的な行動目標を出す。	C以下の場合は取組を改善する。	個人面談数調査及び生徒へのアンケート	
⑥	一人一人の進路目標に対するきめ細やかな指導を目指すべく個人面談をきめ細かに実施する。	進路指導課第3学年	学業や部活動の両立を目指し、実際に両立させている生徒が徐々に増えつつある。目標意識の高揚も併せて、実力養成のための補習、資格試験、模擬試験においても頑張りを見せている。個人レベルでの自主・協調の研鑽を一層積ませる必要がある。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数、生徒の進路実現に向けて個人面談を実施した。	A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	(5回) A 7.3回	《成果》 昼食時および放課後を利用して、効果的な面談が行えた。就職は適性に合った就職先を提示できたと考えられる。進学は進路先の決定と具体的な学習方法を提示し、生徒も納得し学習を重ねることができた。 【課題】 数名が直前になっても進路を決定できずに、悩む生徒がいた。 『改善策』 大学の具体的な情報提示をより詳細にし、夏までには進路先を全員が確定できるようにする。	C以下の場合は取組を改善する。	個人面談数調査及び生徒へのアンケート	
2	安全、安心な学校づくりを推進し、規範意識・公共心等の醸成と変化できる精神的なたくまさを備えた「人間力の育成」を図る。	生徒指導課各学年	① 遅刻ゼロ運動をはじめて3年目となるが、理由のない遅刻や遅刻ぎりぎりの登校がかなり減ってきた。今年度も目標達成日を増やして運動を続け、余裕をもった登校が安定した学校生活につながり、時間を上手に管理する習慣を身につけさせたい。昨年度は「遅刻0の日」140日達成を目標とし、137日(80.5%) / 170日(3年生の卒業準備まで)であった。	【成果指標】	遅刻0(ゼロ)の日が年間合計で、 毎日の「遅刻0の日」の集計結果を生徒玄関の掲示黒板に示し、全校生徒が意識して取り組んだ。 A 140日以上 B 130日以上 C 120日以上 D 120日未満	(57日) C 122日	《成果》 全校生徒で取り組み、3年生が卒業準備期間に入る2月初旬まで、遅刻のない日が122日/167(73.1%)であった。昨年度は137日/170(80.6%)であった。 【課題】 時間に余裕をもった5分前行動(登校)を意識して行動している、との生徒アンケート回答は83%にとどまり、3年生に比べて1、2年生で若干名、2学期以降の遅刻の常習がみられた。 『改善策』 1学期にしっかりと高校生活のリズムを安定させ、基本的な生活習慣が確立するよう意識させる。保護者との連携・協力を強め、2学期9月以降の生活リズムを崩さないよう、面談週間設けて進路目標をもった積極的な学校生活にするよう働きかける。	C以下の場合は取組を改善する。	毎日の出欠調査	
			② 「いじめ調査」を月末に実施し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努める。	生徒指導課各学年	いじめの未然防止に取り組み、調査結果からでは見えない部分もあることを認識し注意を怠らない。また、メール等による誹謗・中傷などのいじめはなかなか発見しにくく、すべての教職員で生徒を見守る必要がある。	【努力指標】 いじめを見逃さない学校づくりに取り組んだ。 ア. よく当てはまる。 イ. 当てはまる。 ウ. あまり当てはまらない。 エ. 当てはまらない。 A ア.イの合計が95%以上 B ア.イの合計が90%以上 C ア.イの合計が80%以上 D ア.イの合計が80%未満	(83.3%) B 92.5%	《成果》 朝の挨拶運動や交通安全指導、SH時の教室巡回や昼食時の校内巡視、担任や部顧問の面談週間、毎月はいじめ調査アンケートなど、すべての教職員で生徒に声かけ、見守りを意識して取り組んだ。(教職員アンケートで、前期は20名/24の83.3%、後期は25名/27の93%が、ア、イに回答) 【課題】 昨年度以上に限られた職員数のなか、校務等が重なり時間の確保や調整が難しくなっている。 『改善策』 限られた職員体制でも効果的な見守りや指導となるよう、見守り活動に時間や期間を設けて集中的に行うなど、すべて教職員の連携や協力体制で取り組めるよう調整する。また、生徒会などの活動からも、いじめを見逃さない学校全体の雰囲気づくりにつながる活動を働きかける。	C以下の場合は取組を改善する。	教員へのアンケート
			③ 生徒会の「元気で活気のある全校」の目標を実現するため、PTAの協力も得て、全校生徒が挨拶運動を実施する。	生徒会各学年 生徒指導課 PTA	昨年度の前期・後期アンケート結果で、93.6%の生徒が自らすすんで挨拶をしていると回答している。今年度も「おはよう！声かけ運動」の伝統を継続して行い、各学年においても朝のSH時や学年集会で大きな声で挨拶できる指導を続ける必要がある。	【成果指標】 自分から進んで挨拶をしている生徒が増えた。 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	(92.5%) B 92.2%	《成果》 生徒アンケートで前期は92.5%、後期は92.2%の生徒が自ら進んで挨拶していること回答している。 【課題】 昨年度と同様、10余名に消極的な回答がみられ、学年が下がるほどに、挨拶の声が小さかったり自分の方から挨拶ができない、言えないなどの様子もみられる。 『改善策』 学年や生徒会、進路指導と連携を図りながら、登校時「おはよう！声かけ運動」、SH時の挨拶指導や学年集会、面接指導等を通じて指導を続けたい。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間集計) 最終集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
3 部活動の強化と生徒会活動の活性化を進めるとともに、教職員の多忙化改善に取り組み「生徒と向き合う時間の確保」を図る。	① 部活動加入後の積極的な活動を推進する。	生徒会	多くの生徒が部に加入しているが、所属だけにとどまる生徒も見られ、生徒全員が積極的に部活動に取り組むよう指導する必要がある。	【成果指標】 部活動に加入後も、積極的に活動していた。	積極的に部活動を行っている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(95.0%) A 90.7%	《成果》 生徒アンケートで前期は95.0%、後期は90.7%の生徒が積極的に部活動を行っていると回答。 【課題】 全員加入の部活動において、積極的に参加できなかったと回答した生徒も10余名おり、彼らが参加しやすい部活動の在り方を模索する。 『改善策』 部活動に積極的に参加できなかった部活動部員と面談し、彼ら自身が目標を設定し、参加する場面を機会を設ける。各部の顧問と連携し、部活動を監督することで、部員の活動が見られていることを生徒に意識させる。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート
	② 教職員の多忙化改善に取り組む。	教頭	近年、本校職員の勤務時間外勤務時間が減少してきているが、いまだ部活動指導時間や生徒と向き合う時間の確保と両立できておらず、職員のライフワークバランスを取る必要がある。	【成果指標】 適正な退庁時間で、帰宅していた。	職員の勤務時間外勤務時間の平均が、 A 45時間以下 B 50時間以下 C 55時間以下 D 55時間より多い	(51時間) B 49.7時間	《成果》 4～9月までの平均が51時間であったが、4～12月までの平均が49.7時間となった。前期は昨年比1時間減であったが、2学期は大きく前年を下回り、50時間を切ることができた(前年は4～12月までの平均52.2時間)。12月は80時間を上回る教員が0名であった。 【課題】 これまでの成果は勤務効率の向上の結果であり、今後は仕事量の軽減と更なる意識向上が求められる。 『改善策』 仕事量の軽減:タブレット活用によるペーパーレス化、会議の効率化 意識向上:余裕をもった周知と適切な設定、期限厳守の徹底	C以下の場合は取組を改善する。	時間外勤務時間調査
	③ 悩みを持つ生徒に対し、全教職員が生徒と向き合い、共感的に話を聞く時間を確保する。	保健厚生教育相談	面談週間などで、丁寧に対応していく計画だが、さらに生徒の様子をよく観察し親身になって相談していく必要がある。	【満足度指標】 「先生方は親身になって相談に乗ってくれた。」と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	「先生方は親身になって相談に乗ってくれた。」と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	(86.1%) B 85.9%	《成果》 約86%の生徒が先生方は親身になって相談に乗ってくれていると回答したが、中間報告時とほぼ同程度で、A評価は得られなかった。180人中24名の生徒が不満足(あまり、全く相談に乗ってくれない)という回答をしていた。 【課題】 本来、生徒全員が満足できるようにしたいが、今回24名の生徒が不満感を持っており信頼関係が弱いと思われる生徒もいる。 『改善策』 不満を感じていると思われる生徒1人1人の状況を把握し、ていねいに話を聞いていく。教員全体が親身に当たって生徒に対応していく意識を持つ。又カウンセリングマインドに基づき面談できるよう共通理解を図る。面談の機会に、生徒を割り振り、学年団や教員全体が面談に関わるよう工夫し、教員全体で生徒を見守っているという姿勢を示す。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート
4 地域における6次産業の担い手として、「地域産業の振興に貢献できる人材の育成」を図る。	① 各種イベントやボランティア活動をとおして、地域との交流を図るとともに、地域社会に貢献する。	地域創造科	能登町内外には各種イベントやボランティア活動があるが、生徒によっては参加しない傾向がある。全員の生徒が諸活動に参加し地域交流を一層深める必要がある。	【成果指標】 多くの活動がある中で2回以上参加することができた。	能登町内外の活動に2回以上参加したと答えた生徒の割合が、 A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	(49.4%) A 88.1%	《成果》 84名中、2回以上参加した生徒は74名であった。1年生30名中26名、2年生28名中23名、3年生26名中25名(2回25名、3回20名、4回11名、5回7名、6回5名、7・8回各2名、9・10回各1名) 【課題】 授業で実施したもの(やまめの放流、校外清掃など)や年度当初になかった新たな活動も含んでおり、自主的に参加した活動(クリーンビーチ)の回答が少ない。 『改善策』 次年度は校内行事と校外行事に分けて集計し、自主的に参加した生徒の割合がより高くなるよう職員と協力していく。	C以下の場合は取組を改善する。	生徒へのアンケート
	② 保護者や地域の方に能登高校の理解を深めてもらい、行事に参加してもらうことで本校の人材育成に協力してもらう。	総務課	「能登高だより」の配布や能登町広報誌「のと広報」に掲載することによって学校理解に効果があると考えられる。今年度も来校者を一層増やす工夫が求められている。様々なイベントとをからめ、まずはPTAの参加人数を増加させていきたい。	【成果指標】 来校する保護者・地域住民が増えた。	来校された保護者・地域の方(学級懇談会・能登高祭・能登高商店開店時・教育ウィーク・PTA行事等)の人数の合計が、 A 1400人以上 B 1200人以上 C 1000人以上 D 1000人未満	(860人) A 1460人	《成果》 能登高祭では天候にも恵まれ、沢山の地域の方や保護者、家族が来校された。PTA運営委員会を始め理事会や簡単な打合せなど役員が足を運んでくださった。また、生徒の各種発表会等にもポスターや広報などで広く周知することができ、トータルで目標の来校者数1,460人を達成することができた。 【課題】 来年度以降、保護者の負担、特にPTA役員の方の負担が大きいのではないかと心配である。 『改善策』 1人に仕事が集まらないように、分担できることを分担してもらい取り組んでいく。	C以下の場合は取組を改善する。	行事毎の人数調査